

増かさ水 流路が曲がった

阿武隈川 被害集中

合流でききず支流氾濫

日本列島を襲った台風19号は、各地の河川で多くの水害をもたらした。中でも特に被害が集中したとみられているのが、福島県から宮城県を流れる阿武隈川流域だ。田中規夫埼玉大教授（水工学）が15日、被災した流域上空を共同通信社機で調査した。想定以上の雨量を堤防は支えきれず、大きく曲がった流路で水かさが増した上に、急傾斜の山からの水が勢いよく平野にあふれ出していた。田中教授は「台風の大変化に対応した対策を、長い目で見る必要がある」と警告する。

阿武隈川の流れは穏やかなが茶色く濁り、舌のような形で流れ出した泥が至る所に広がっていた。家々が

泥や池に浮かんでいるように見えた。東の阿武隈山地と西の奥羽山脈の間を走る阿武隈

宮城県内で大きく曲がる阿武隈川の流路
11月15日（共同通信社へりから）



霞堤

上流域の福島県内には

川。田中教授は「降雨が元々集中しやすい。今回は、上流域で降った大量の雨が下流域に届くのと同時に雨雲も移動して下流域にも大雨を降らせた」と指摘する。

「霞堤」があった。水を逃がす切れ目があり、洪水の量を減らす効果がある。水害で知られる山梨県の戦国武将、武田信玄が考案したとされる。

堤防はどこどころブロック塀で補強されていたが、川沿いに並んだビニールハウスはつぶれて泥にまみれていた。「堤防ではさばききれず、勢いのあるまま川から水が流れ出した」（田中教授）

宮城県丸森町の上流。阿武隈川は、山地をシグザクに縫うように流れて平野部に広がる。周囲の切り立った山々から現れた支流が、平野部で次々と合流している。

阿武隈川は水かさを増すが、切り立った山に行く手を遮られてほぼ直角に曲がる。「隈」には、川が湾曲して入り込んだ所という意味があり、田中教授によると、この曲がりか所の前の由来となったとの説もある。

水没

阿武隈川本流の曲がりの手前ではいくつかの支流が合流し、水が滞って水位が高くなりやすい。田中教授は、台風19号の大雨で本流は水かさを増し、合流できないうちが支流からあふれ出たとみる。「バックウォーター」とも呼ばれる現象。このためか支流のあちこちで堤防が決壊しているのを、上空から自視できた。

支流の流域では、住宅街の中を網目状に泥が広がっていた。急傾斜の山あいから平野に出た直後の支流は、水に勢いがある元々暴れやすい。

丸森町にはこうした支流がいくつかあって、台風19号の大雨で周囲一帯を水没させたようだ。田中教授は「本流と支流、それぞれの要因が複合して氾濫を起こしたのではないかと分析する。」